登場人物

奥田直哉（22）（25）　大学生

辻本遥（25）（17）　社会人

武本（42）　遥の上司

清美（35）（17）　武元の妻

探偵の男（30）

村人数名

1

照明薄暗い中で花弁が舞っている。
中央に蹲っている直哉。警報の鐘を鳴らす音、逃げ恐れる人々の声。
直哉、顔を上げて正面を向く。
直哉「待ってろ、絶対に見つけるから。何度生まれ変わっても俺は、君を探し出す」
暗転

2

直哉と遥がいる。
直哉が遥の腕を掴み、遥は必死に逃げようとしている。
直哉「待って、ちょっと待ってってば！」
遥「しつこいっ！」
遥が振り向き、反動で直哉が倒れる。
直哉「いてて。急に離すなよ」
遥「なんなの、あなた。道ですれ違っただけの人に『俺のこと覚えてる？』なんて

声かけて！　ナンパ？　今どき流行らないわよ、そんなの」

直哉「ナンパじゃない、俺は君だから声をかけたんだ！　俺のこと覚えてない？」

遥「覚えてない、あなたと私は他人、知らない人！」

直哉「嘘だぁ。本当は覚えてんだろ？」

遥「ナルシスト？　よっぽど自分の顔に自信があるみたいね」

直哉「えっ、そんなにかっこいい？　まぁ、自分でもうすうす気付いて……ってちょっと！」

直哉、去ろうとする遥を引き止める。

遥「なんですか、ナルシストさん」

直哉「そうだな、小さいころは可愛いだの神童だの言われたし、大学生になった今の俺がかっこいいってのは認めるけど」

遥「大学生⁉　私より年下⁉」

直哉「四回生なんで来年から社会人です！

千恵は会社員？　スーツ似合ってる」

遥　「じろじろ見ないでよ！　ナルシスト！」
直哉「ナルシストって呼ばないで！」
遥　「はいはい、もう呼ばないから。サヨウナラ、永遠に」
直哉「いやいやいや、ちょっと待って！」
遥　「しつこいっ！　一分だけ話聞いてあげるから、さっさと用件言って」
直哉「ナルシストってのは自意識過剰なやつのことで俺は……」
遥　「その話題⁉　聞きたくない」
直哉「違う！　なんか反射的に……ちゃんとするから、話聞いて！」
遥　「一分だけね。あと三十秒」
直哉「えっと、えーと」
遥　「一分経った。はい、時間切れ」
直哉「早すぎない⁉」
遥　「私の体内時計は人より少し早いの。じゃ、さようなら」
直哉「単刀直入にいう、好きです」
遥　「どうもありがとう」

逃げようとする遥だが、直哉に腕を掴まれる。

直哉「人が勇気を出して告白したのに！」

遥「勇気なんかちっとも伝わってこなかったけど」

直哉「本気なんだ、ずっと探してたんだ」

遥「誰に頼まれて？」

直哉「頼まれてとかじゃなく、俺が会いたかったから！」

遥「あなたと私は初対面でしょ？　さっき道ですれ違った、これからもう絶対会うことのない他人！」

直哉「違う！　俺はずっと昔から君を知ってる、ずっと探してたんだ」

遥「人違いよ」

直哉「俺が千恵を間違えるはずない」

遥「間違ってる！」

直哉「え？」

遥「ほら、間違ってるじゃない」

直哉「何が？」

遥　「名前。さっきから千恵って呼んでくるけど、私の名前は辻本遥。千恵じゃない」
直哉「……あ」
遥　「さようなら」
直哉「千恵っていうのは前世の名前なんだ」
遥　「前世？」
直哉「そう、生まれ変わる前の。そうか、今は遥って名前なのか。わかった、そう呼ぶ！　遥！」
遥　「いきなり呼び捨て！？　馴れ馴れしすぎない？　もういいわ、私これからデートなの」
直哉「デート？」
遥　「そう、デート」
直哉「俺と？」
遥　「なに言ってるのナルシスト。彼氏とよ」
直哉「だから彼氏って俺のことだろ？」
遥　「あなたじゃなくて年上のかっこいい男の人。男らしくて優しくて誠実で」

直哉「そいつより俺の方がかっこいいと思うよ？」

遥「あなた、自分が思ってるほどかっこよくないからね？　ナルシストくん」

直哉「ナルシストって呼ばないで！」

遥「あぁ、もうこんな時間。急がなきゃ」

遥退場。

直哉「なんで俺以外の男に。待ってるって言ったのに……裏切り者ー！　俺は諦めないからな！」

直哉、遥を追う。

3

遥と武本が腕を組んで歩いている。

遥「ごめんなさい、遅れちゃって。変な男に捕まって」

武本「構わないよ、来てくれただけで嬉しい。僕に愛想が尽きて約束すっぽかされたかと思った」

遥「そんなことない！　私は武本課長が好きよ。ずっと傍にいたい」

武本「ありがとう。そうだな、ずっと一緒にいよう」

遥「……ねぇ、結婚の話、どうかな？」

武本「あぁ、待たせてすまないね。妻と話し合っているが、なかなか決着がつかなくて」

遥「……大丈夫よね？」

武本「大丈夫さ。ちゃんと話し合って、妻と離婚することが出来たら君と結婚するよ」

遥「ありがとう。信じて待ってる」

遥、武本の腕にしがみ付く。

武本「ところで、変な男に捕まったっていうのは？」

遥「そう、それ！　道路で急に声をかけてきて、私のこと昔から知ってるとか、前世で約束したとか」

武本「前世？」

遥　「俺たちは前世で恋人同士だったんだ、君を探して100回生まれ変わった、みたいなこと言ってたわ」

武本「100回？　果てしないな、ロマンチックだ」

遥　「そんな言葉で女がついて来るなんて思ってるのかしら。ほんと、ナルシストなんだから」

武本「知り合いかい？」

遥　「えっ？　だから違うって。今日初めて会っただけの知らない人よ。どうしてそんなこと聞くの？」

武本「いや、なんだかまるで……そんなことより早く行こうか、店の予約時間に遅れてしまう」

遥　「そうね、早く行きましょう」

二人、去る。

反対側から直哉がやってくる。

直哉「くっそー、見失った。やっと、やっと見つけたのに。なんで覚えてないんだ、

千恵は……あ、今の名前は遥か。かわいい名前だよな、はるか……今はそんなことどうでもいいだろ、俺のバカ！　とにかく、遥には前世の記憶がないのか？　でも諦められるか、ずっと探してたんだ。これが最後のチャンスなんだ。絶対に諦めない」

直哉、走って去る

照明変化、夜が明けた表現。

直哉、ふらふらとした足取りで歩いてくる。

直哉「もう夜が明けたのか、どこ行ったんだ」

遥が電話をしながら直哉の後ろを通り過ぎようとする。

直哉、遥に気付き、腕を掴む。

直哉「見つけた」

遥「きゃ！　あなた昨日の……（携帯に）あ、大丈夫です。……はい、失礼します。（携帯切る）　なに？　まだなにか用が……どうしたの？　大丈夫？」

遥、直哉の様子がおかしいことに気付き顔を覗き込む。

直哉「やっと、やっと見つけた」

遥「見つけたって。もしかしてあれから一晩中、私を探してたの？　そういえば、この服昨日も」

直哉、倒れる。

遥「えっ、ちょっと！　大丈夫？　ねぇ！」

遥の声と共に照明FO

4

照明FI、薄暗い

警報の鐘を鳴らす音

村人1「敵軍が攻め入ってきた。逃げろ！」

村人1「ダメだ、ここはもう終わりだ。女と子どもだけでもなんとか逃げ……ぐあっ」

村人1切られる

女「あなた！」

村人2「なにしてんだ、あんた、早く逃げろ！」

敵軍（声のみ）「村のもの全員殺せ、逃がすな！」

女　「きゃ……」

女、倒れる

村人２「ダメだ、もうダメだ」

村人２逃げる。

照明変化。

桜の木の下で遥がしゃがみ込んでいる。手を合わせ、祈りを捧げている仕草。

背後から直哉がやってきて、振り向こうとする遥だが、

直哉「待って」

直哉、遥の髪に触れる。

直哉「花びらついてる……はい、とれた。もう顔上げていいよ、千恵」

遥　「ありがとう、直哉」

振り返って微笑む遥の隣に座る直哉。

直哉「千恵の髪って綺麗だよな」

遥　「嘘言わないでよ、もう三日も洗ってないのに」

直哉「……隣の村がやられたらしい。次はうちだ、夕方には移動するぞ」

遥「うん、わかってる」

直哉「大丈夫、千恵は俺が守るから」

遥「……どうして戦争なんか起こるんだろう。なんで私、こんな時代に生まれたんだろう」

直哉「仕方ないよ、こういう時代なんだ」

遥「生まれ変わったら、もっと平和な時代にいけるかな？」

直哉「そうだな、生まれ変わるころには戦争も終わって、きっと幸せな生活が送れてる」

遥「私、その時代に生まれたかった。平和に暮らして、直哉と一緒に幸せになりたかった」

直哉「なれるよ。今はこんなだけど、生まれ変わったら一緒に幸せになろう」

遥「一緒になんて無理よ。生まれ変わったら今の記憶は無くなるって巫女様言って

た。今の私たちとは別人になって、違う人生を歩むって」

直哉「昔、父さんが言ってた事なんだけど…人間って本気で生まれ変わりたいって思った時から、自分の意思をもったまま100回生まれ変わる事ができるらしいんだ。知ってる？」

遥「知らない。自分の意思をもったまま100回？」

直哉「俺が千恵に会いたいと強く願って死ぬだろ？　そしたら、生まれ変わったあと今の記憶がちゃんと残ってて、千恵のことを覚えてる、死ぬまでずっと。その輪廻転生が100回続くって話。いいか、100回もチャンスがあるんだぞ。もし一回目で別々の時代に生まれて会えなかったとしても、二回目がある　。二回目で遠い場所に生まれてしまったら千恵を探しに世界中を駆け回る。それがダメなら三回目、四回目。100回目になるまで、

俺は何回でも生まれ変わって千恵を探し出す」

遥「そんなことできるの？」

直哉「できるさ。人の絆は時代を超えるんだ」

遥「じゃあ、生まれ変わったら私と直哉は、幸せになれる？」

直哉「なれる！」

遥「でも、もし会えなかったら……」

直哉「大丈夫、俺は絶対に千恵を探し出す。絶対見つけるから、安心して待ってろ」

遥「……わかった、信じる。直哉を信じて私、待ってる」

照明変化　暗く

警報の鐘を鳴らす音

村人（声のみ）「敵軍が攻めてきたぞ、逃げろ！」

直哉「そんな、こんなに早くうちの村にも。千恵、こっちだ」

遥「うん！」

直哉、遥の手をひいて逃げようとするが、敵兵に出くわしてしまう。

直哉「逃げろ、千恵！　裏道を通ったら山の向こうまで逃げれる。覚えてるよな？」

遥「覚えてるけど、でも……」

直哉「早く逃げろ！　大丈夫、約束しただろ。絶対に見つけるから、待ってろ。だから今は逃げて、俺の前で死なないでくれ！」

遥「直哉……直哉も死なないで……待ってる、待ってるからね！　生まれ変わった先でずっと、直哉を待ってるから！」

遥、逃げる。

直哉、武器を取り出し敵兵と戦うが、途中で切られて蹲る。

桜の花弁が舞う。

直哉、顔を上げて正面を向く。

直哉「約束……待ってろ、絶対に見つけるから。何度生まれ変わっても俺は、君を探し出す」

5

遥が電話をかけている。

遥「はい、まだ病院にいます。彼の意識が戻るまではここにいようと思って……や、そういう関係じゃなくて。自分でもよくわからないけど、傍にいてあげなくちゃいけない気がして……だから、そういうのじゃないですってば！　すみません、三時の会議には戻ります。はい、失礼します」

遥、電話を切ってため息をつく。

遥が背を向けている方から、直哉が出てきてじっと遥を見つめる。

直哉「髪、相変わらず綺麗だな」

遥「えっ、何やってるの？　ちゃんと寝てなきゃ」

直哉「俺なんでこんなところに、ここ……病院？」

遥「急に倒れるんだもん、びっくりしちゃった。救急車なんて初めて乗ったわ」

直哉「千恵、あ、いや。遥が助けてくれたのか？」

遥「助けたっていうか、まぁ一応ね」

直哉「ありがとう」

遥「ねぇ、もしかして一晩中私のこと探してたの？」

直哉「え？　うん、あれからずっと探してた」

遥「どうして？　なんでそこまでして私に構うの？」

直哉「約束したんだ。生まれ変わったら一緒に幸せになろうって。人は100回生まれ変われるって話、覚えてる？」

遥「知らない。100回生まれ変わる？」

直哉「人間は本気で生まれ変わりたいって思ったときから、その意思をもったまま100回生まれ変わることが出来るんだ。父さんの話は本当だった。俺は何度も生まれ変わった。だけどどの人生でも遥に会うことが出来なくて……諦めかけたと

きやっと見つけたんだ。やっと会えた、この時代で」

遥「……そんなの困る」

直哉「どうして？」

遥「私、彼氏いるの」

直哉「別れろよ、俺はずっと探してたんだぞ。何度も、何度も生まれ変わって」

遥「勝手なこと言わないで！　私が好きなのは彼なの。私のために悩んでくれて、やっと決断してくれて……彼を裏切りたくないの。だからあなたとは付き合えない。100回生まれ変わることが出来るんでしょ？　だったら今回は諦めて、次生まれ変わった時にまた……」

直哉「無理なんだよ！」

遥「無理？　どうして？」

直哉「これが最後のチャンス……100回目なんだ。九十九回死んで100回生まれ変わった。次はないんだ、俺が俺として生きることができる最後の時代。もし死んで

生まれ変わっても次は、千恵と一緒に幸せになりたいっていう意思は持っていない。忘れちゃうんだよ。そうしたら、もう千恵と一緒に幸せになることはできない」

遥「だから名前違うってば！　とにかく、私は私なの。今の生活もあるし。彼が」

直哉「なんだよ彼って。どんなやつだよ？　そんなにいい奴なのか？　俺より？　俺は絶対ち……遥のことだけ好きだぞ？　どうせたいしたやつじゃないだろ、今どきのやつなんか浮気とかも平気で」

遥、直哉を叩く。

遥「何も知らないくせに、彼の悪口言わないで！」

直哉「……そうだな。俺は、今の千恵のことは何も知らない。名前さえも、知らなかった」

遥「……私、会社に戻らないといけないから」

直哉「待って」

遥「……なに？」

直哉「ごめん、言いすぎた。ごめん……遥は今、ちゃんと幸せ？」

遥「……うん、幸せよ」

直哉「彼氏はいい人？　遥のこと、大切にしてくれる？」

遥「いい人よ、私のこと真剣に考えてくれて……私、彼を信じてついていこうと思う」

直哉「そうか……なら仕方ないな。仕方ない……」

遥「ごめんなさい」

直哉「謝るのは俺のほうだ、見つけるの遅くなってごめん……って、遥の中の千恵に伝えといて。それで遥は、残りの人生幸せにな」

遥「……」

直哉「でも、俺はずっと遥のこと好きだから。遥が困ってたり泣いてたりしたら一番に

駆けつける。それくらいは許してくれる？」

遥「それくらいは、いいけど」

直哉「やった、約束な。遥が泣いてたら俺、飛んでいくからな？　だから泣かないように、幸せに生きて」

直哉、去る

遥「なによ、ナルシストなんだから……ごめんなさい」

6

照明、上手側だけついている。

遥が電話をかけている。

何回もかけるが繋がらない様子。

やっと繋がったらしく、話し出す。

遥「もしもし武本課長。今仕事終わりました。いつもの場所でいいんですよね？

え、今日は行けないかも？　大丈夫ですよ、私も昨日遅刻したし、遅れても……

え、今なんて……奥さん？　……え？」

電話をしながら去る。

下手側の照明つく、

直哉が玄関のベルを押している。

直哉「すみませーん、宅配便です」

反応がない。もう一度押してみるが、

やはり反応はない。

直哉「留守かなぁ。くそっ、今日はついてないな。急にバイトの代打頼まれるし、留守だし、ふられる……し」

直哉が帽子を深く被り、荷物を持って帰ろうとしたとき、ものすごい音がしてドアから武本が飛び出て来る。

直哉「えっ、大丈夫ですか？」

清美「ふざけないでよ！　あんたなんてもう離婚よ！」

続いて清美がドアから出てきて、封筒を武本に投げつける。

武本「痛っ！　なんだよ、こうして謝ってるだろ？」

直哉「うわぁ、厄介なことに巻き込まれそうな予感」

清美「謝れば許されると思ってるの？」

武本「すみません！」

清美「謝るしか脳がないようね、このハゲ！出て行け！」

直哉「あ、ドア閉めますか？　その前に受け取りのサインを」

清美「なにあんた？　空気読みなさいよ、ナルシスト！」

清美、直哉をふっとばしてドアを閉める。

直哉「ナルシストって……」

武本「くそっ、こっちが下手に出てりゃぁ。ハゲとか言いやがって」

直哉「ズラですか、これ？」

直哉、武本の頭を引っ張る。

武本「いてて、ひっぱらないでくれ！　地毛だよ！」

直哉「そうですか」

髪の毛が数本抜けたらしい。

直哉、ちょっと嫌な顔で手を見た後、髪の毛をふるい落とす。

直哉「何したんですか？」

武本「浮気だよ！　三年目の浮気くらい多めに見てくれてもいいじゃないか」

直哉「あー、結婚三年目ですか？」

武本「十年目だよ」

直哉「……。とりあえず荷物の受け取りを」

武本「浮気した僕も悪いけど、そこまですることなくないか？」

直哉「開き直らないでください。どーでもいいんでサインください」

武本「なんだ君、僕のファンなの？」

直哉「そっちのサインじゃないです。やっぱズラですよね、その頭」

武本「地毛だって！　それより聞いてくれよ」

直哉「一分だけなら……」

武本「探偵を雇ってた、ここんとこずっと僕を監視してたらしい！」

直哉「そりゃ監視したくもなるでしょ。浮気してんだから。残り十秒です」

武本「君の体内時計おかしくない！？　そんなことより聞いてくれ、写真まで撮られてたんだ」

武本、封筒の中から写真を取り出す。

直哉「はい一分。時間切れなのでサインを……」

立ち上がる直哉だが、武本が持っている写真に目を奪われる。

直哉「その人……」

武本「可愛い子だろ？　浮気相手だよ、会社の部下」

直哉「はるか……」

武本「ん、遥ちゃんの知り合い？」

直哉「じゃぁ、あんたが遥の彼氏？」

武本「彼氏？　いやいや、付き合ってないから、彼氏とかそういうのじゃ……」

直哉、武本の胸倉を掴む。

直哉「さっきの人、奥さんですよね？」

武本「あぁ、そうだよ？」

直哉「じゃあ遥は……浮気？」

武本「あぁ、そうか。君、遥ちゃんの知り合いなんだっけ？」

直哉「遥はあんたのこと本気で好きで……信じてついていくって、幸せになるって」

武本「幸せになれるわけないだろ？　というより遥ちゃんそんなこといってたのか、別れて正解だった。確かに、最近結婚がどうとかうるさかったな、冗談だと思ってたのに」

直哉「冗談？」

武本「だってそうだろ？　既婚者の僕とあの子が幸せになんてあり得ないよ。うちは毎度のことだから奥さんもそのうち許してくれる……」

直哉「許すわけないだろ！」

直哉、武本を突き飛ばす。

直哉「あんた、奥さんの顔ちゃんと見たか？　毎度のこと？　今まで何度も繰り返してきたのか？　そんなの許すわけないだろ！」

武本「ははっ、君はまだ若いからわからないかもしれないが、夫婦というものは……」

直哉「死ぬ時まで互いを愛することを誓った相手だよ！　他にわき目をふらず、相手を一途に愛する、その約束を交わした相手……周りから祝福されて、幸せを築いていける関係なのに……奥さんに謝れ！」

武本「いやだから、妻は僕がこういうやつだってわかってるんだ。今は怒ってるけど、時間が経てば許してくれる」

直哉「怒ってなんかねーよ、泣いてただろ！」

武本「泣いてた？」

直哉「さっきあんたを追い出したとき、泣いてたんだよ、あんたの奥さん！」

武本「何いってる……涙なんて……」

直哉「あー、もう！　100回も生まれ変わったけど、あんたみたいな頭おかしいやつ初めてだよ！」

武本「100回って……もしかして君」

直哉「あんたの何倍も生きてる俺の経験から言って、その歳でズラって滅多にいない。かなりヤバいっすよ」

直哉、駆け足で去る。

武本「どうして僕がズラって……妻にさえ隠してるのに……あれ？　そういえばさっき、ハゲって言われたような……」

武本、立ち上がって直哉と反対の方向へ走り去る。

反対から遥が歩いてくる。

遥「終わった……ううん、これで良かったの。わかってた、私なんて相手にされてないし、こんなことダメだって……」

遥の歩む方向から、探偵の男出てくる。

探偵の男は不自然に、遥の前に立って歩みを邪魔する。

遥　「あの……どいてくれません？」

探偵の男「別れたんですよね？」

遥　「え？」

探偵の男「会社の、あの上司と別れましたよね？　あ、すみません。僕、個人で探偵事務所をやっている者で。今回、あなたと上司の関係を調べていました」

遥　「探偵……あぁ、そっか、慰謝料ですか？　そうですよね、悪いのは私ですもんね」

探偵の男「違います、そうじゃなくて……」

探偵の男、じっと遥を見つめる。

探偵の男「僕のこと、覚えてませんか？」

遥　「えっ？」

探偵の男「この二週間ずっとあなたのことを追ってました。毎晩一緒に夜道を歩いて、朝も一緒に通勤して、同じお店に入って……隣の席に座ったことだってあります」

遥　「あの、なに言って……」

探偵の男が遥の両手を握りしめる。

驚く遥だが、咄嗟のことに振り解けず

探偵の男を見つめる。

探偵の男「調査しているうちに、あなたのことを好きになりました。付き合ってください」

遥「ちょ、なに言ってるんですか！」

遥が手を離し、男を睨む。

探偵の男「わかってます。こんな時に、別れたばかりなのにすみません」

遥「それもあるけどそれより、私あなたのこと知らないわ。そんな人に言い寄られても怖いだけで……」

何かに気がついた遥、胸に手を当てる。

遥「私、怖くなかった……あの人に話しかけられたとき、怖いなんて思わなかった。むしろ……今だって、武本課長に別れを切り出されたのに、裏切られたのに、こんなに落ち着いてる……私、あの人のこと……」

一人で話す遥に探偵の男が近づき、鞄の中から写真を取り出す。

探偵の男「僕と付き合ってくれますよね？」

遥、写真を奪い取って目を見開く。

遥「この写真、私と武本課長が会ってる時の……」

探偵の男「他にもたくさんあります。これ、会社にバレたら困りますよね？　僕の言うこと聞いてくれますよね？」

遥「脅してるの？　こんな事して付き合っても意味ないでしょ？」

探偵の男「そ、そうなんですか？　僕、誰かと付き合ったことなくて……こんな気持ちも初めてだし」

直哉の声「ちょっと待った、ちょっと待った！」

直哉飛び出してきて、遥と探偵の男の間に立つ。

直哉「（探偵の男に向かって）なんだ、あんた！　（遥に向かって）なに、こいつ」

遥　「なにって……探偵事務所の人？」

直哉「探偵事務所？　もしかして何か相談してた？　ごめん！　絡まれてると思って飛び出してきたんだけど」

遥　「いや、絡まれた……って解釈で間違ってないというか、告白されたというか」

直哉「告白⁉　俺というものがありながら！」

探偵の男「おまえ、昨日から遥ちゃんに付きまとってる男……」

直哉「遥ちゃん⁉　馴れ馴れしく名前呼びやがって！　遥、こいつとの関係は？」

遥　「ついさっき、道端で声をかけてきただけの他人、知らない人」

直哉「出会って二十四時間も経ってないじゃないか！　そんなやつに遥ちゃんなんて呼ばせるなよ！」

遥　「あなた、出会って五分で私のこと呼び捨てにしたわよね？」

直哉「しかもいきなり告白だなんて！　100回生きた俺だけど、そんな色ボケてるやつ初めてたぞ！」

遥「あなた、巨大なブーメラン突き刺さってるけどわかってる？　出会って三秒で私を口説いてたわよね？」

直哉「とにかく！　あいつとの縁は切れたんだろ？」

遥「あいつ？」

直哉「浮気の……あ、いや、遥は本気だったんだよな、でもあいつにとっては浮気で……ごめん、うまく言えないけど、フリーになったんなら俺ともう一度、恋人になってください！」

直哉の気迫に押されて遥、探偵の男は言葉を失っている。

遥「あは、あははっ」

お腹を抱えて笑う遥、目尻の涙を拭って直哉を見上げる。

遥　「もう一度って……私、あなたと恋人になったことないから」

直哉「えっ？　あ、いや、だから前世で」

遥　「覚えてないから知らないわよ、ふふっ」

直哉「えぇー……じゃあ、今から俺と恋をして……付き合ってください」

直哉、遥に手のひらを差し出す。

遥　「約束、守ってくれたのね」

直哉「約束？」

遥　「私が困ったり悲しんでたら飛んで駆けつけるって、さっき約束したでしょ？

前世がどうのの事だって100回も生まれ変わって必死に、私を探してくれた」

直哉「俺じゃないよ、遥だ」

遥　「私？」

直哉「俺と交わした約束は全部守りたいって昔、遥が……千恵がそう言ってくれて、頑張ってくれて。千恵の姿を見てたから俺は、ここまで頑張ることができた」

遥「そっか、頑張り屋さんは私の方だったのね」

遥、直哉に一歩近づき手を伸ばす。

探偵の男「待ってください！」

手が触れる直前、探偵の男が叫んだことで直哉と遥、振り返る。

探偵の男「そ、そいつと出会ったのは昨日ですよね？　僕は二週間前から遥ちゃんを知ってる。僕の方が付き合い長いんだ！」

直哉「えっ、知り合い？」

遥「だから知らないって。一方的に好かれてただけ」

直哉「なんだそれ！　遥の気持ちも考えずに！」

遥「ブーメラン……」

探偵の男「僕……僕の方が、遥ちゃんのことを知ってる！　写真だっていっぱいあるんだ！」

遥「そうだった、写真！　返して、それ！」

探偵の男「僕と付き合ってくれるなら……」

遥　「だから、そんなことしても意味ないって……」

直哉「あの写真の遥かわいいな。でも別の男と一緒の写真か。欲しいけど悔しい、でもリビングに飾って毎日眺めたい……」

遥　「なに言ってるの！？　あなたちょっと黙ってて！」

探偵の男「僕と付き合ってくれないなら、この写真、遥ちゃんの会社に送りつけるからな！」

探偵の男、写真を収めた鞄を抱えて走り去る。

呆然とする直哉と遥だが、少しの間を置いて遥が男を追う。

遥　「その写真返して！」

直哉「あっ、待て遥！　走ったら危な……

遥！」

照明変わる。

車のブレーキ音と衝撃音。

床に倒れている直哉と、直哉の側に座る遥。

運転手の声「す、すみません！　すぐに救急車を……」

喧騒、人々の声。

通行人1「事故？」

通行人2「男の人がトラックに轢かれた」

通行人3「でも今の、女の人が道路に飛び出して、男の人がそれをかばう感じで……」

遥「直哉？」

遥が顔を覗き込むと、直哉が目を開ける。

直哉「なまえ……」

遥「えっ？」

直哉「俺、遥に名乗ってなかったよな？　なんで俺の名前知ってるの？」

遥「……病院の、受付で」

直哉「俺の今の名前、直樹。直哉は生まれ変わる前、千恵と一緒に生きてたときの名前」

遥　「……わたし、無意識に……」

直哉「やっぱり千恵だった。やっと会えた。ち……ごめん、今は遥だったな。はるか」

遥　「……なお、や？」

直哉「うん、そうだよ。やっと俺を見てくれた」

直哉、遥に手を伸ばそうとするがすぐに落ちる。

遥、直哉の手を握りしめる。

遥　「ごめ……ごめんなさい」

直哉「なんで謝るの？　むしろ俺はお礼を言いたい、振り向いてくれてありがとう」

遥　「だってこんな……痛いでしょ、私のせいでこんなに血が出て……あっ、ごめんね。もう喋らないで、すぐに救急車が来るから、安静に……」

直哉「無理だな、今回はここで終わりだ。わかるんだ、死ぬ瞬間には慣れた。この人生は今日で終わり」

遥　「そんなこと言わないで……」

直哉「不思議だな。あと少しで死ぬってのに、それ程の痛みなのに、すげー喋れる。最後だから、神様が時間くれてるのかな……100回も生きた最後のご褒美がこれなら、まぁ、悪くない」

遥「し、死なないで！　大丈夫だから、すぐに救急車が来るから！」

直哉「遥、泣かないで」

遥「泣いてない、泣いてないよ！」

直哉「100回も生きてたらさ、心がどんな表情してるかわかるようになるんだ。遥は今、泣いてるよ……遥と交わした約束は全部守りたかったのに、一緒に幸せになるって約束は守れなかった、ごめん」

遥「……その約束、私が引き継ぐ」

直哉「えっ？」

遥「知ってる？　人間って自分の意思をもったまま100回生まれ変わることが出来るのよ」

直哉「知ってるよ、俺が言ったことだから…

…えっ？」

遥「本当はわかってた、自分の気持ち。私は最初からあなたに惹かれてた、だけど素直になれなくて……不思議なの。昨日出会ったばかりなのに私は、あなたのことが……きっと私は、この気持ちを持ったまま生まれ変わることができる。それだけの意思がある」

直哉「どうかな。だって明らかに、俺のほうが遥のこと好きだもん」

遥「その答えは、次会ったときに教えてあげる。直哉、私を見つけてくれてありがとう」

直哉「……また会えるかな？」

遥「会えるよ。だって100回もあるのよ？

絶対にあなたを探し出す」

直哉「100回って意外と短いぞ？」

遥「だったら101回目で見つける」

直哉「ははっ、オーバーしてるよ」

遥「大丈夫、私の愛は制限を越えるの」

直哉「俺、次生まれ変わっても遥のこと覚えてないと思うけど。それでも探してくれる？」

遥「大丈夫。何があっても、絶対に諦めない」

直哉「……約束」

直哉が小指を突き出し、遥はそれをとり自分の小指と絡ませる。

直哉「生まれ変わったら、幸せになろう。信じていいか？」

遥「うん、信じて。約束」

直哉、目を閉じて遥の膝の上に倒れる。

遥「待ってて、絶対に見つけるから。何度生まれ変わっても私は、あなたを探し出す」

救急車のサイレンの音

7

スポット、上手に遥が立っている。

遥　「それから私は彼を探して何度も生まれ変わった」

歩き出す遥をスポットで追う。

遥　「何度も何度も……たくさんの時代、たくさんの時を生きた」

台詞を言いながら上着を脱ぎ捨てていき、たくさんの人物になったことを表す。

遥の向かう先に武本がいて、手を差し伸べる。

遥　「ときには恋もしたくなった」

その手を振り払い、また歩き出す。

遥　「でも違う。私が探してるのは……」

男たちの手を振り払って歩き、客席に向く。

遥　「何度でも、たとえ100回目で見つからなくても、101回で、102回目で103回目で200回目で。約束したの、遠い昔に」

遥、最後の上着を脱ぎ、制服姿になって立ち止まる。

照明変化。

花弁が舞っていて、遥と同じ制服をきた清美がやってくる。

清美「はるちゃん！」

遥、気付かず上を向いている。

清美「はるちゃんってば！」

清美、遥の腕を掴む。

遥「わっ、びっくりした」

清美「何してたの？」

遥「うーん、ちょっと、昔のこと思い出してた」

清美「昔？　はるちゃんって時々、ボケてるよね」

遥「感慨に浸ってる、って言ってくれる？」

清美「わぁ、難しい言葉！　はるちゃんって物知りだよね！　学校ほとんど来てないのに成績いいし！」

遥「もう何度も高校生やってるからね。授業なんかより、全国を回って探し出す方が大事だし」

清美「はるちゃんは将来トラベラーだね！
はっ、そういえば昔の時代がどうこうって時々言ってるよね？　はるちゃんってもしかしてタイムトラベラー？」
遥「それとはちょっと違うけど……意識がタイムスリップする時はある、かな」
清美「今もそうだったの？」
遥「うん、今は……0回目の時のこと思い出してた」
清美「0回目？」
遥「その人生での私はね、清美とすごく仲が悪かったの」
清美「はるちゃんと私が？」
遥「私が悪いんだけどね。清美の男に手を出しちゃって」
清美「ええっ！　武本くんに！？　やめて！私の彼氏なんだから！」
遥「大丈夫、今は全く興味ない。将来ハゲるしね、あの人」
清美「えっ、武本くんハゲるの？」

遥「ていうか私も今の名前は遥だし、武本課長の奥さんも清美って名前だった。あの時と同じ……なんの因果だろ」

遥、上を向いて桜を見つめる。

清美は遥を見つめていたが、しばらくして何かを思いついたようにポンっと手を叩く。

清美「そういえば、今日から赴任する先生の話知ってる？」

遥「知らない。どんな人？」

清美「若い男の先生でね、かっこいいって噂になってるよ」

遥「女子高生のかっこいいはあてにならないなぁ」

清美「私さっき見ちゃったんだけどね、かっこいいって言うより……」

遥「言うより？」

清美「ナルシスト、って感じだったな」

遥の背後から、スーツを着た直哉登場。

遥と清美、気づかない。

手鏡で顔を気にしていた直哉だが、遥たちに気がついて歩みを進める。

遥「ナルシストって、初対面の印象がそれって……」

清美「あっ……」

清美、直哉に気がついて指差す。

遥が振り向こうとするが、

直哉「待って」

その声に、遥は動きを止める。

直哉、遥の髪に触れる。

直哉「花びらついてる……はい、とれた。もう顔上げていいよ」

遥が振り返り、直哉と向き合う。

直哉「君、綺麗な髪してるね。はじめまして、今日から君たちの先生になる奥田直哉です」

照明落として遥と直哉にスポット

直哉「遠い昔の約束」

遥「待ってて、私は必ず」

直哉「俺は君を」

遥　「あなたを」

直哉・遥「探し出す」

照明戻る

遥　「ふふっ、そっちは直哉なんだ」

直哉「えっ？」

遥　「はじめまして、ナルシスト先生」

直哉「だからナルシストって呼ばないでっ！

えっ、あれ？」

遥、正面を向いて。

遥　「誰かを強く思う気持ちは、人の絆は時代を、制限さえも越える。お待たせ、直哉。ずっと待ってた……あの時の答え、あなたが思っている以上に私は、あなたのことが大好きです」

―終―